



徹底したプロ意識で輝き続けた
最高峰のプリマドンナ

砂原美智子

声楽家
1923 - 1987

Profile

1923年広島県呉市生まれ。6歳より声楽とピアノを習い始め、42年東京音楽学校（現・東京芸術大学）声楽科入学。47年に藤原歌劇団に入団、同年『ラ・ボエーム』ムゼッタでデビュー。51年からパリに渡り、パリ国立オペラ・コミック座を本拠としながらヨーロッパ各地の歌劇場に客演し、日本と欧州の重要な公演で出演を重ねる。『蝶々夫人』の海外での舞台は700回を数える。69年昭和音楽短期大学教授、84年昭和音楽大学教授。87年没。

戦後すぐに藤原歌劇団のヒロインとして彗星のように登場、渡仏後はパリを拠点としてヨーロッパ中で客演公演を行い、国際的な舞台で活躍した。なかでも『蝶々夫人』を当たり役として、海外での舞台だけでも700回を数えたほどで、日本が生んだ真のプリマドンナである。本学でも教授として指導にあたり、歌手としての真髓を後進に伝えた。

- 日本藝術院会員／声楽家
栗林 義信
- 日本歌曲振興会の会長／声楽家
本宮 寛子
- 昭和音楽大学客員教授／指揮者
星出 豊（S38年度東京声専卒）
- 昭和音楽大学短期大学部客員教授／声楽家
下八川 淳子
- 昭和音楽大学企画広報部長
下八川 公祐
- 昭和音楽大学図書館課
高橋 節子（S52年度短期大学卒、門下生）

戦後に現れたプリマドンナ

それは、戦後の混乱期に現れた本物の「プリマドンナ」だった。1947年の藤原歌劇団『ラ・ボエーム』〔ブッチーニ〕のムゼッタでオペラ・デビューを飾った砂原美智子は、コケティッシュな魅力を見せたかと思えば、同年の『タンホイザー』〔ワーグナー〕のヴェーヌス、『カルメン』〔ビゼー〕のミカエラでも舞台上に立ち、妖艶、清純と対照的な役もこなした。翌年には『椿姫』〔ヴェルディ〕のヴィオレッタ、また『蝶々夫人』〔ブッチーニ〕のタイトルロールを演じ、瞬間にスター・ソプラノの地位を揺るぎないものにしたのである。

1951年からはパリを拠点として、約20年間にわたりヨーロッパ各地の名門歌劇場や音楽祭に出演を続け、名実ともに国際的なプリマとして活躍した。なかでも『蝶々さん』を当たり役として、外国での出演が700回におよぶなど、空前にして絶後の実績を積み上げたのである。『蝶々夫人』を世界的な水準で歌える日本人歌手というのはどの時代でも求められてきたが、この偉業こそが、砂原の世界での評価とその実力を何より物語っている。



藤原歌劇団公演で蝶々夫人を演じる砂原。左はシャープレス役の栗林義信。指揮：ニコラ・ルッチ、演出：青山圭男、管弦楽：東京交響楽団。（1971年7月、東京文化会館）

まっすぐに向き合う姿

砂原が残した数多くの実績はよく知られているが、その素顔を伝えるエピソードは少ない。自身は、歌うこと以外「ほかになんにもできない女」（朝日新聞1972年7月30日）とあっけらかんと語っている。「先生は当時の厚木校舎の近くにアパートを借りていて、授業がある週3日

はそこに泊まられていました。夕飯などは、一緒にそのアパートに住むお弟子さんが用意されていたのですが、その方が食事を持っていかないと、飲み物だけで済ませてしまうこともあったようです」（高橋節子）

そのような生活感のなさが嫌味にならず、むしろ周囲から尊敬をもって愛されたのは、音楽への一途な姿勢とともに、他者に対してまっすぐに向き合う、誠実で優しい人柄があったからだろう。「砂原先生の門下生が、とある宗教団体に夢中になりすぎて学業にかなりの支障が出てしまったのですが、その際に自らその施設に向き、門の前で『私は砂原美智子です。私の弟子を返しなさい』とおっしゃって、学生を取り戻したことは家のなかで語り草でした。学校は学生の人生に責任があるのだと強く心に残ったエピソードです。砂原先生が逝かれた日、両親が狼狽し、特に母が泣き崩れて立ち上がれなかった姿はいまでも脳裏に焼き付いています。本当に大切な方がいなくなってしまうのだと感じました」（下八川公祐）

「まだ私が講師だったころ、すでに大スターだった砂原先生は近づきがたいオーラがあり、ただただ憧れの存在として畏怖をもって見ていたことを思い出します。しかし、誰かを怒ったり、悪口を言うようなことは一切なく、実際お話しをすれば大変優しいお人柄で、現れるだけで周囲がパツと明るくなるような方でした」（下八川淳子）



大学での声楽レッスンより。

自分を律し、周囲を高める

砂原の舞台にかけるプロフェッショナルなリズムは、その誠実な人柄とともに多くの共演者にも影響を与えた。「音楽稽古の初日に行ったら、砂原さ

んの前は楽譜どころか譜面台すらないので。あれには本当に驚きました。立ち稽古より前の、音楽稽古の最初で楽譜がないというのは……砂原美智子という存在が強烈な印象で記憶に残った最初です」（栗林義信）



藤原歌劇団公演『トスカ』（ブッチーニ）より。左はカヴァラドッソ役の五十嵐喜芳。指揮：ウラジミール・ベニチ、演出：ピエロ・ファッジオーニ、管弦楽：東京フィルハーモニー交響楽団。（1970年3月、東京文化会館）

「憧れの大プリマでした。舞台上でのふるまいについてもいろいろと教えてくださいました。例えば、舞台上を下手から上手へ行くのに、直線的ではなく、曲線を描いて歩く美しく見えるんだとおっしゃるのです。われわれ歌手にとって大変貴重なことも教えてくださいました」（本宮寛子）

「音楽に対して真摯でしたから、最初の稽古のときに全部出来上がってないのは嫌いで、自分に厳しい方でしたが、ほかの人には優しくかった。たとえ相手役が下手であっても彼女は嫌な顔一つせず、それどころか、どこかで助けてあげればもうちょっと上手くなるかしら、という考え方なんです。それによって、自分も上手くなる方向性を作り出すという……本当に、プリマドンナの鏡です」（星出豊）

歌声だけでなく、その人間性においても尊敬を集め、いまなお称えられるプリマ。演奏家としても指導者としても、万全の準備で最高の結果を出すことを生涯かけて追及した砂原のエピソードは、時を経るほどに輝きを増す。プリマドンナである前に、人としてどう生きるべきか。時代が流れても変わらないもの、変えてはいけないものがあることを、砂原の生きざまが深く教えてくれる。